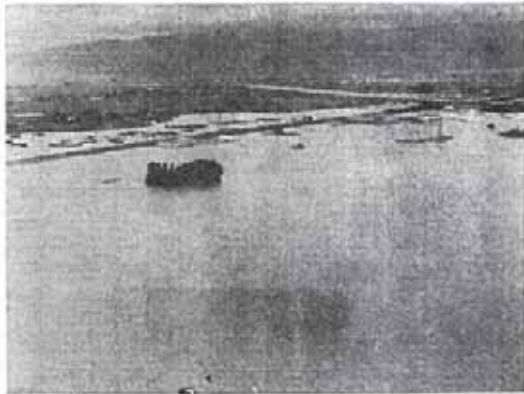




長良大橋脇に避難した車がずらりと続く
=大垣市墨俣町 9月16日付け岐阜新聞より



泥海になお浮く家々



被災地を知事と空から見る

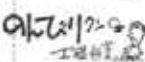
変わらぬ泥海

明と暗はつきり

安八町の川と判別出来ぬ町

十連坊堤を死守へ

優勝め切り円滑化 水防団が補強に全力



台風17号被災地の
被害にからず
被害を減らす

早くが家確かめたい！
強いあすへの不安
医者を、薬を、飲み水を

再び大雨・洪水注意報
県下台風17号の影響で突風も

総合結婚式場 積翠園
只今秋・来春の予約受付中
岐阜市津島山 0562-960001

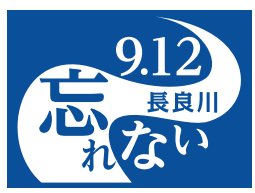


取り調べ官が暴行

大森、保全申し立て



読んで水害の
被害を申し上げます
安田 信氏 銀行
岐阜県岐阜市
〒500-0001



決壊から2日経っても水がひかない安八町南部の様子
9月14日付け岐阜新聞より

197年 9月14日 岐阜新聞 第32509号

豪雨禍やっとな越す

県下の被害316億円

被災者は16万人超す



第一号台風が去った岐阜県は、豪雨による被害が深刻化している。県下の被害額は316億円に達し、被災者は16万人を超す。各地で土砂崩れや家屋倒壊が相次ぎ、死者も163人に達した。被害は、県下のほぼ全域に及ぶ。特に、北濃地方や美濃地方で被害が深刻である。各地で、土砂崩れや家屋倒壊が相次ぎ、死者も163人に達した。被害は、県下のほぼ全域に及ぶ。特に、北濃地方や美濃地方で被害が深刻である。

死者・不明163人

死者・不明163人。被害は、県下のほぼ全域に及ぶ。特に、北濃地方や美濃地方で被害が深刻である。

徹夜の作業進む

水位も徐々に低下、順調。徹夜の作業が進む。水位も徐々に低下、順調。

米の直接参加も

米の直接参加も。米の直接参加も。米の直接参加も。

0.2%引き上げ

0.2%引き上げ。政管健保で厚相が諮問。0.2%引き上げ。政管健保で厚相が諮問。

幹事長に松野氏?

幹事長に松野氏?。首相きよう改造人事着手。幹事長に松野氏?。首相きよう改造人事着手。

岐阜新聞 創刊97年
岐阜日日新聞社
岐阜県岐阜市本町二丁目
電話 058-2211111
FAX 058-2211112
社説部 058-2211113
編集 058-2211114
印刷 058-2211115
販売 058-2211116

日本料理 松野亭

北濃地方 東北 再上陸の恐れ

安八町

十八楼 総合結婚式・宿泊・宴会に
岐阜県岐阜市本町二丁目 電話 058-2211111

読んで本書の お見舞い申し上げます
昭和五十二年九月十四日
三井物産株式会社 岐阜支店

心の水害の 救済をいっしょに
大垣共立銀行



県内の被害状況を伝える紙面
9月14日付け岐阜新聞より



西松 敬二氏 所有



十連坊堤防（旧輪中堤）で浸水を死守する水防団の様子

= 輪之内町

9月14日付け岐阜新聞より



羽島市桑原町の浸水状況



長良川の水防活動状況
＝羽島市福寿町平方
9月12日撮影



当時を振り返って

丹羽 正治 さん (元安八町長=当時)

普段から避難経路の確認を

堤防が決壊するまで、皆が必死になって水防作業をしていました。消防団員をはじめ、区長の皆さん、役場の職員も風呂も入らず、不眠不休で水防作業や情報収集に徹していました。特に現場では、長良川の土のう積みや月の輪工法の作業をはじめ、砂利が路肩に押され、そこに水が溜まるので路肩の水切りをしていました。輪中堤では、北から流れてくる水を食い止めようと、畑の土をもらって土のうに泥を詰めていました。

「なんとしても切らしてはいかん」と、切れないことを信じて、破堤する直前まで杭打ちをしていましたが、いよいよ切れた時は、四つん這いになって、みんな命辛々逃げて助かりました。ただ、1人が犠牲となり、罪の意識がずっとありました。不幸中の幸いは、切れた日が日曜日の昼間で、子どもたちの多くが自宅にいたことでした。

また、前日に避難準備命令を出しましたが、区長を通じて、手分けして、文章で区民の皆さんに直接伝えてもらいました。住民の皆さんの意識も高く、落ち着いて行動してくださいました。このような災害に迅速かつ正確に情報を伝達するため、水害後には各戸に防災無線を備えるようにしました。

水害など非常時の指揮命令は、ちょっとした訓練だけでは難しいと思います。普段から非常時に備えた組織を作り、心の備えを持ち、避難経路や危機管理をしっかり想定しておかないといけません。また、皆さん一人一人が心がけていただくことが大切であると痛感しました。



決壊で浸水したため近くの結小学校へ避難していた
住民たちが、一夜明けて水の中を我が家に帰る
=安八町



当時を振り返って

西松 重吉 さん (元安八町議会議長、当時消防団)

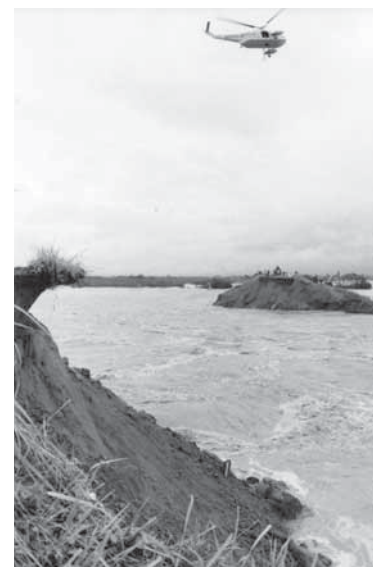
水害の歴史を知ることが大切

当時は消防団が水防団を兼ねていて、私は消防団(現在の自衛防災隊)の本部長として現場で指揮を執っていました。堤防が切れる直前には、ガマ(穴ぼこ)が20カ所ほど見つかり、水が吹き出していました。急いで月の輪工法などで水を止めていましたが、一番ひどかった所が切れました。ほとんどの人が、まさか切れるとは思っていませんでした。

かつての堤防はわん曲していて、交通量が増えてきたので、まっすぐにしようということで築堤工事が始まりました。しかし、川原の濁り水に溜まった泥を積んで堤防を作っていたため、切れた時は積み上げた上部だけが滑り、50~60cmほど掘れて流れていき、昔からの堤防だけが残っている状態でした。

堤防が決壊したところは、約200年前にも切れたいわゆる「切れ所」でした。過去に何度も「堤防が切れた」という歴史を知り、事実を頭に入れておくことが、まず大切であると感じました。安八町は、長良川、揖斐川という大きな河川が2本あり、河川流域に住むとしたら、「100年に一度は水害があるもの」というくらいの危機意識を持ち、雨の降り方や河川の水の増え方なども考えることも求められていると思います。

また、災害が発生する前から、家族の連絡方法などをしっかり確認することも大切です。実際に災害の危険が高まった場合は、役場の指示に従ってまず避難することが基本であると思います。向こう三軒両隣といわれるように、助け合うことも必要であると感じています。



大きく決壊口を開けた長良川堤防=安八町大森地内



当時を振り返って

富田 憲一さん（安八町善光区長、当時消防団）

日頃から協力できる人間関係を



あの時は消防団1年目で、10年分の仕事を一気にしたように感じます。かつて堤防の草は、牛のえさ用として刈り取られてツルツルでしたが、あの頃は草が生い茂ってしていました。草を刈らないことには堤防の様子が分からないため、近くの建設会社から草刈り機を借りて、草刈りをしました。すると、作業をしていた足元が田んぼの面まで下がっていることが分かり、とても驚きました。

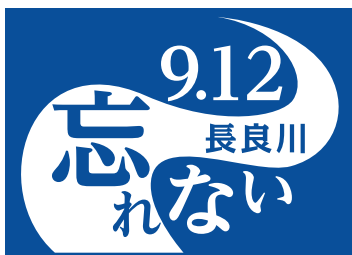
杭を打っても簡単に入ってしまい、どんどんゆがんでいって、水が染み込んできたことを今でも覚えています。のり崩れが至る所で起きていて、泥が下がるため、草の根っこがプチプチという嫌な音を立てながら切れていったのが印象に残っています。あの時は寝ている間もなく、時間の感覚は全くわかりませんでした。

活動の甲斐もなく、堤防は切れてしまいました。その時は、泥が左回りに回転して落ちていきました。舗装道路をつたって必死に現場から離れましたが、他の団員とはぐれてしまい、家族とも会うことができなかつたため、数日間、行方不明者として扱われるほど、町内では情報が行き渡っていませんでした。

水害から40年が経ちましたが、災害の歴史は風化してしまいます。しかし、伝えていかないといけないと感じています。また、災害に起きた時に大切なのは、協力とその理解だと思います。自分勝手に行動すると、進むものも進みません。日頃から協力できる人間関係を築き、お互いを理解し合えることが大切だと思います。



応急作業開始「杭打ち工法」が繰り広げられた
＝長良川堤（安八町）



当時を振り返って

森岡 公治 さん（岐阜市島水防団長、当時水防団員）

肩まで水に浸かるほど浸水



伊勢湾台風が襲来した1959(昭和34)年から3年間、島地区は水害に見舞われ、小学生、中学生ながらにして、川の怖さを感じてきました。

9・12水害の時も、長良川が決壊する前に、伊自良川が決壊、鳥羽川で越水があり、島地区は浸水して養魚場の鯉が多く流されて来て私の町内で泳いでいました。私は当時、水防団9年目で、早田川の排水機場に詰めて、堤防の巡視などをしたり、杭打ち作業の手伝いなどをしたりしていました。設置されたばかりの排水ポンプが連日の稼働により止まってしまったため、排水機場の前の水はみるみるうちに溜まり、水があふれ出ていました。夕方、一時帰宅しようとした時には、道路の水かさか肩の上まで浸かるほどまで増し、電信柱を頼りに家まで帰りました。その時、畑の小屋に置いてあった石灰が水中で小屋ごと燃えていたことを覚えています。避難所の島小学校一帯が冠水してしまったので、水防団員の笹舟を長良川本流より内側へ移動させて物資を運んだのも印象に残っています。

長良川が増水すると、土のおいがして、川の中央が盛り上がり、ごみが淵の方に寄ってきまして何ともいわれない恐怖を感じます。ガマから水が吹き出していて、水が濁ってきたら危ないです。また、昔から破堤する時には、堤防も蛇のようになねり出します。そして、堤防が破堤する場所にいたら上流に逃げるのではなく、下流へ逃げろと教わりました。また、川筋は本来動くものですが、現在は堤防が整備され、川の変化に気づくことが少なくなりました。2004(平成16)年に長良川が増水した時には、全団員で長良川の様子を確認しましたが、平常時の堤防の状況を知らないと、異常がわからないため、日ごろの訓練や清掃の際にも、普段の川を知ることにも意識を持つように伝えています。



長良川の濁流が不気味さを増す。
広がる岐阜市島地区の泥海（上方は岐阜市繁華街）



当時を振り返って

伊藤 光好 さん（故人）

（元海津町長、元高須輪中水防組合管理者）



輪中堤に土のう、血眼で濁流防ぐ

9.12 水害の決壊地点は、高須輪中（現海津市と羽島市の一部）から5～6 km上流部でした。9月8日から降り始めた雨によって長良川は増水し、9日から14日までほとんど不眠不休で高須輪中の水防活動に専念しました。

12日は午前7時ごろ水防団員から東海大橋付近が危ないとの通報を受けました。水防本部にいた私は現場に走りました。橋のたもとの堤防上から長良川を眺めると、濁流は橋をひと呑みにするがごとく、荒れ狂ったように見えました。

そのうち堤防上に立っている私の足元から、2 cmほどの亀裂ができました。亀裂は上流に向かって20mほど「パチパチ」と音を立てるように進んでいきました。驚いた私は、直ちに無線で堤防の法下に土のうを積むよう水防団に命じました。団員が素早く約 3500の土のうを積んでくれたおかげで亀裂の拡大は止まりました。その対策がわずかでも遅れていたら、法は崩れて破堤していたかもしれないと想像すると背筋が寒くなります。

その直後の午前10時半ごろ、無線で安八の右岸堤の決壊を知りました。堤内に入った水は5～6 km下流の私どもの高須輪中に押し寄せてきますので、対策を急がねばなりません。輪之内町長も、輪中堤で町を守りたいから応援してほしいと要請に來られました。直ちに2万俵の土のうを提供し、水防団を送り、血眼になって防御しました。幸いにも輪中堤で水を防ぐことに成功し、大過なきを得た次第です。



（平成元年4月に開催されたシンポジウムでの講演から）



当時を振り返って

林 正順 さん (元 国土交通省木曽川上流河川事務所職員)

水害の現場、写真で後世に伝える



当時、入所3年目で工務課にいました。以後、定年退職するまで、さまざまな水害と向き合ってきましたが、20歳の時に経験した9・12豪雨災害では、水害の現実を初めて目の当たりにして、衝撃が大きく、災害に対する考え方も変わりました。

安八町で長良川が破堤した時は、事務所にいました。上司から「現場に行くぞ」と言われ、係長と同期と3人で、回転灯をつけながら安八町に急行しました。到着すると、堤防が決壊したところは、中央部分に粘土層が見え、木杭や砂もありました。私の任務は、写真を撮ることでした。上流から撮影していましたが、堤防が崩れ、足元で決壊口がどんどん広がっていくのがわかりました。無我夢中で写真を撮りましたが、今となって、当時の様子を伝える限られた資料の一つとなり、役割を果たせたのではと思っています。

退職後は、引き続き、河川に関わる仕事をしています。堤防の状況や川の様子を歩きながら見て回り、災害を未然に防ぐための点検を行っています。「陥没していないか」「滑りや亀裂はないか」などを確認して記録しています。堤防には同じものはなく、一つ一つ見て、少しの変状や堤防の様子を見ることを積み重ねていく必要があります。

川のことは地域で暮らしている人がよく知っています。また、これまで地域の方々と地道に築き上げてきた協力関係があります。一つひとつの積み重ねが、いざという時に大きな力になります。今後も水防団や建設業の方々など地域の皆さんとの協力関係を絶やさず、レベルを落とさずに防災意識を持ち続けていくことが大切だと思います。



堤防復旧作業＝長良川安八町大森決壊現場